

## イギリスと西ドイツの幼稚園では

八 森 知 栄 子

私は昭和四十六年から四十七年にかけて約七ヵ月間、ヨーロッパの幼稚園を自分で選びながら見学してきました。その時に見たり聞いた入園についてこれから述べてみたいと思います。

### イギリス

イギリスのナースリースクールには三歳と四歳の子どもが行きますが、公立のナースリーはロンドンとかマンチェスターなどの大都市にしかないとのことでした。私のしばらくいた南イギリスのプールという町では、日本の保育ママにあたる婦人が三・四歳の十人位の子どもを預っているプレイングループが十数個ありました。それぞれのナースリーにはウエイティングリスト(登録名簿)というものが、それには子ども名前・住所・年齢が書き込まれていました。そして親の移動や、五歳の子どものインファントスクール(幼児学級)への進級で、欠員がでると、ウエイティングリストに登録されている年齢に達している子どもから入って

きているようでした。生まれてしばらくすると登録するお母さんもいるとのことでした。

ロンドン市内には約三十の公立ナースリースクールがあり、その保育料は「教育」ということで無料です。私の訪ねた三つの公立ナースリーには、一クラス三十名の二クラスがありました。けれども二つの部屋と庭で六十名の子どもたちが自由に遊んでおり、先生の受け持つ子どもがそれぞれ三十名なのだなという印象を受けました。このナースリーも登録名簿があり、ある園長先生は、ノートに書き込まれている子ども名とリストを見せて下さいました。その時には五十名ほどの子どもが待っているとのことでした。やはり進級や親の移動によって欠員があると子どもたちが入園しているようで、ある園で私は、新しくナースリーに入ったであろう子どもを、保育時間中に見守っている一人のお母さんに出会いました。

## 西ドイツ

西ドイツの首都ボンには、私のいた当時、教会立と市立あわせで九十九のキンダーガルテンがありました。

子どもは両親がカソリック系の場合はその幼稚園に、新教の時にはその幼稚園にだいたい通っているとある幼稚園の先生は言われました。それぞれの幼稚園はワルテンリステ（登録名簿）をもっており、イギリスと同様に席のあいた順に子どもが入っていました。市立の幼稚園にはパーソナルボーゲン（個人調査書兼申込み用紙）というのがあり、それには子どもの名前・年齢・住所・国籍・出生地・宗教・兄弟・予防接種を受けたかについて、両親の名前・出生地・職業・住所・両親の状態（結婚・死別・離婚・別居・独身）・同居人について書き込まれるようになっており学歴の欄はありませんでした。

私の訪ねた十三の幼稚園はほとんどが三歳・四歳・五歳の混合クラスよりなっていて、各年齢の数は一定ではありませんでした。そのために欠員のできた順の子どもの入園が自然に行なわれているように感じました。ボンに住む私の知人は自分の娘さんの入園の時のようすを次のように手紙で知らせて下さいました。

「——さて裕恵も二月から近所のキンダーガルテンの午後のクッラッセに入園し、毎日喜んで通っています。今月から三、四人新

しく入りましたが、日本のような入園式を想像し、初日は親子共や緊張して出かけましたが、入口で「では四時半に迎えに来て」と言われただけでやや拍子抜けいたしました。子どもは十五人ほど、タンテ（注・幼稚園の先生にあたる）は四人、入園金もなく月額二〇マルク（注・一マルクは約百円）を銀行に納めるだけです。——」

イギリスでも西ドイツでも幼稚園の絶対数は足りませんでした。ボンでも三歳から五歳までの半分の子どもしか幼稚園に行けていないと、教会市立すべての幼稚園を管轄しているユンゲントアムトの役人は言っておられました。幼稚園の先生は、母親がいくつかの幼稚園に申し込んでも行けない子がいると言われました。私がある園を訪ねている時、先生が子どもを入園させてほしいと頼みに来たお母さんを断わっている場面に出会ったこともありました。西ドイツの幼稚園では統一的な行事が少ないようで、私のいた夏から冬にかけてはクリスマスが一番の行事でした。日々の保育が日常の遊びと同じように静かに繰り広げられ、生活の中に保育の基盤があると思われました。行事的なものは家族や地域の子どもと、幼稚園の外で参加しているようでした。私は十一月の聖マルチン祭の夜の親と子のランブ行列を見たり、クリスマス時のキリストの劇を見て、このような環境の中で子どもたちは育っていくのだなと深く感じました。（お茶の水女子大学大学院）